

令和 4年 3月

松井幸子 学位論文審査要旨

主 査 松 浦 治 代
副主査 谷 村 千 華
同 片 岡 英 幸

主論文

Factorial structure of nursing practices related to support for decision-making regarding consent for surgery in elderly patients with dementia

(認知症高齢者の手術同意への意思決定支援に関わる看護実践の因子構造)

(著者：松井幸子、山本美輪)

令和4年 Yonago Acta Medica 65巻 70～81頁

参考論文

1. Nursing support for decision-making about surgery as currently offered to elderly patients with dementia

(認知症高齢者の手術同意への意思決定に関わる看護援助の在り方)

(著者：松井幸子、山本美輪、三好陽子)

平成29年 International journal of Japanese nursing care practice and study
6巻 7頁～23頁

学 位 論 文 要 旨

Factorial structure of nursing practices related to support for decision-making regarding consent for surgery in elderly patients with dementia

(認知症高齢者の手術同意への意思決定支援に関わる看護実践の因子構造)

目 的

本研究の目的は、認知症高齢者の手術同意への意思決定支援における看護実践の因子構造を明らかにすることである。

方 法

近畿地域の2次救急病院整形外科病棟に勤務する経験年数3年以上の看護師を対象に無記名自記式質問紙調査を行った。松井ら(2017)の先行研究である「認知症高齢者の手術同意への意思決定支援に関わる看護援助の在り方」の内容分析の結果を基に、看護実践の質問30項目を作成して内容妥当性を検討した。意思決定支援の看護実践における項目分析では、単純統計量を算出し、フロア効果、天井効果を確認し、I-T(Item-Total)相関を算出した。相関の無い項目を除いた意思決定支援看護実践29項目を観測変数として探索的因子分析(プロマックス回転)を行い、構成概念妥当性および内的一貫性を検討した。妥当性の検証は、Kaiser-Meyer-Olkin(KMO)を用いた。信頼性の検証はCronbach's α 係数およびI-R(Item-Remainder)相関を算出して検討した。

結 果

対象看護師は112名、性別は女性108名(96.4%)、男性4名(3.6%)、年齢は 38.3 ± 9.8 歳(Mean \pm SD)、経験年数は10年以上が67名(59.8%)であった。看護実践の因子構造の妥当性を確認するとフロア効果は1変数、天井効果は2変数で確認されたが、その程度はわずかであり、また、該当する項目の得点分布を確認したところ偏りが見られるが、今回は尺度構成ではなく因子構造を明らかにするため分析に加えた。

各因子構造を確認するために、I-T相関を確認したところ0.301~0.783の範囲であった。有意な相関の無い1変数を除外して、29項目の探索的因子分析を行った。因子数を固有値が1以上と定義して、スクリープロットを確認すると、9.148、3.015、1.574、1.212、1.087、0.842であり、24項目5因子構造が確認できた。意思決定支援看護実践24項

目の因子分析の結果は、KMO値0.858、Bartlettの球面性検定においては有意差が有り ($P < 0.001$) 観測変数の妥当性が示された。また固有値1以上の因子5つ (【医療者協働による認知症高齢患者のアドボカシーの実現】 【患者・家族の生活・価値観を考慮した助言】 【認知症高齢患者の理解を深める支援】 【認知症高齢患者の意思表出支援】 【認知症高齢患者のICへの立ち会い】) が抽出された。意思決定支援看護実践24項目のCronbach's α 係数を求めたところ0.926と高値を示した。下位因子のCronbach's α 係数は、0.773から0.906だった。

考 察

認知症高齢患者の手術同意における意思決定支援の看護実践項目について、KMO値0.858、Bartlett球面性検定では有意 ($P < 0.001$)であったことより、24観測変数の妥当性が示され分析が妥当であったと考えられる。また、固有値1以上の5因子が抽出され、累積寄与率は66.821%、第1因子から第5因子のCronbach's α 係数は0.773から0.906であり、高い整合性を示していた。意思決定支援看護実践24項目のCronbach's α 係数は0.926であったことから抽出された因子は、意思決定支援看護実践因子として妥当であると判断した。

次に抽出された5因子の解釈をして内容の妥当性を確認した。がん患者の意思決定支援および急性期病棟の看護実践力の因子について比較すると、他のこれらの看護領域にはみられなかった因子として、【認知症高齢患者の理解を深める支援】 【認知症高齢患者の意思表出支援】が挙げられる。認知症高齢患者の対象理解がいかに難しいか、それ故、患者の意思を確認し患者を知ろうとする姿勢や理解を深めることの重要性を示しているといえる。看護師は、認知症疾患別の症状やその対応を理解した上で、患者・家族との意図的なコミュニケーションを通して、患者の主観的体験や意思を知ることが重要である。

結 論

近畿地域の2次救急病院整形外科病棟に勤務する経験年数3年以上の看護師に、認知症高齢患者の手術同意における意思決定支援に関わる看護実践について自記式質問紙調査を行った。意思決定支援看護実践項目を用いて探索的因子分析(プロマックス回転)を行った。認知症高齢者の手術同意のための意思決定支援に関する看護実践の因子構造として、5因子24項目が示され、また、その因子構造の信頼性と構成概念妥当性が示された。